

フォルカー・ブラウンの詩における 「我々の権力」像をめぐって

～東ドイツ社会主義の変質と詩人～

南 守 夫

はじめに：人民所有プラス民主主義

1989年秋の東ドイツの改革運動の中で一つの大きな節目となったものに11月4日の東ベルリンにおける50万人デモがある。演劇関係者や作家たちの呼びかけで行われた東ドイツ史上空前の規模の自由な示威行動において、“Wir sind das Volk”（「我々が人民だ」）のシュプレヒコールとともに、人々は東ドイツの社会主義の在り方の根本的な改革を要求した。その一週間後にフォルカー・ブラウン（Volker Braun）は、『自由の経験』と題する文章を新聞に寄せ、「我々は1918年以来ドイツにおける最大の民主主義運動を経験している」と述べ、「人民所有プラス民主主義、これはまだ試みられたことがない、まだ世界中のどこにおいても。メイド・イン・GDRとえば、〈生産する者たちの手中にある権力〉のことを意味するようになるだろう。」と書いた。従来の「中央指令的またはスターリン主義的社会主義」に対し社会主義的所有形態と民主主義の結合に基づく、人民権力の本来の、あるいは新しい在り方の実験のためのスローガンを提起したのである。そして、こう呼びかけた—「20年前ある劇中人物が挑発的に語った、〈これは地上で最も退屈な国だ〉と。今私は自信をもって言う、〈最も興味深い国だ〉と。というのは我々の関心がより重要な役割を果たすようになったからである。さあこの国の中へと入って行こう。」つまり、西ドイツへ逃げ出すことではなく、その新しい実験に参加することを呼びかけた

のである。もちろん、その前途にあるいは「長い歴史的な仕事によって鋳き返されなければならない本来の畑であり、そこに何かがあるのかを我々は知らないのである」ということを付け加えることも忘れなかった。その後の両ドイツの統一問題の急展開という状況の中で、この実験が果たして成功するかどうか、誰にも予断は許されない。しかし、少なくとも東ドイツには民主的な社会主義権力の在り方について真摯に模索する人々が存在していることは確かである。そして「生産する者の手中にある権力」、すなわち社会主義社会における人民権力の在り方というテーマは1960年代の詩人としての出発以来、「我々の権力」(unsere Macht)という言葉とともに、ブラウンの詩の核心を貫く赤い糸である。ブラウンの詩における「我々の権力」像をたどることは、東ドイツの社会主義の変質の姿が詩の言葉によって定着された一つの負のアルバムを繰ることであり、そこには同時にそれに批判的に向き合ってきた一人の詩人の姿が浮かび上がって来るのである。

1. 動きのある統一 Bewegliche Einheit

1939年生れのブラウンは60年代初めに詩人として登場した。彼は、東ドイツの社会主義建設の年月に自己形成した最初の世代の詩人の一人である。彼等は、いわば社会主義社会の建設現場に、好むと好まざるにかかわらず、召集されたのである。

そうだ、バターのために、このみすぼらしい手動シャベルで、俺たちは掘り出す

名声と希望に満ちた胸を、ひとつの祖国を

リンルーフ湿地の溝の上に、太陽がまだ高く上りきらない前に。

(『青年作業計画』Jugendobjekt²⁾から)

そして、そのとき、自分たちの独自の実験として、この新しい社会の形成に参加しようとする姿勢をほとぼしるような勢いのある文体で、ブラウンは語った。

出来あいのものを持って来るな！ 俺たちに必要なのは半製品だ。
味の抜けた焼き肉を捨てろ—森とナイフを持って来い！
ここではすべて実験なのだ、硬直したルーティンではなく。

(「要求」Anspruch³⁾から)

そして建設されるべき社会、「ひとつの祖国」のイメージをブラウンはたとえば「ジャズ」に仮託して次のように描いた。

「ジャズ」(Jazz)⁴⁾

これがジャズの秘密だ—

コントラバスが硬直したオーケストラから突然響き出す。

打楽器は気の抜けた歌を叩き壊す。

ピアノは死体のような絶対服従を切り裂く。

サキソフォンはスコアの鎖をぶちぎる。

関節よ、ふるえよ—ぼく達は新しいテーマを思いっきり演奏する

そのためのぼくらの能力、そしてぼくが必要とするものは—ぼく自身で

あることだ

ここでぼくはそうありたい—ぼくはぼく自身を歌う。

あやしげで大仰な表現のがれきの中から和音が

音符の枯れた藪の中から何がぼく達の頭上へと身を乗り出して来る

心臓の鼓動のようなバンジョー、サキソフォンの語るような音—

ぼく達のハーモニーが伸び上がる—動きのある統一

ひとりひとりがそれぞれベストを演じ切る、共同のテーマに合せて。

それが未来の音楽だ—ひとりひとりが創造者！

君は君である権利を持っている、そしてぼくはぼくだ—

そして誰もぼく達は結びつかない、自分自身でないような者とは
紛れもない者でなければ、怒りにおいて、愛において、闘いにおいて。

明快なメタファーをスピーディーに繰り出すこの語り口に若い詩人の勢いが快く定着されている。ここでは一方で、「硬直したオーケストラ」、「気の抜けた歌」、「死体のような絶対服従」あるいは「スコアの鎖」などの比喩によって示された既存の社会における個性の不在への批判と「自分自身であること」への要請がある。他方同時に、「共同のテーマ」や「動きのある統一」などの詩句に見られるように、社会的な連帯への要請も現れている。このふたつの要請が、ジャズ演奏の比喩を介して紛れもない個性を持った者同士の連帯、というイメージを結んでいる。しかし、この統一はあくまで『ジャズ』という比喩としてのみ像を結んでいるのであって、現実の東ドイツの社会の中でこの統一が実現されているかどうか、はいうまでもなく別の問題である。それがこの後、問われていくことになる。そして、このもっぱら比喩でできた抽象的な詩に対してさえ、発表当時、東ドイツでは「アメリカ的なデカダンス」とか、「自己中心的な」な傾向とか、「指揮者の否定」などが非難されたのである⁵⁾。このことは、すでにその問いへの答えを暗示するものである。

事実ブラウンはその後次第に個性の発揮を抑圧する社会状況に対する批判を強めていく。その際、「ぼく」つまり「個人」の問題はそれだけ切り離された存在としてではなく、「ぼく達」、つまり社会的に共同体の一員として捕えられている。そして、そこから、一般労働者と国家権力との関係というテーマがブラウンの詩の中心テーマとして形成されていく、つまり、国家権力の在り方を主題とするという意味で、政治詩としての構造を明確にしていくことになる。

2. 「我々」と「我々の権力」の乖離

詩『大衆を称える』(Lob der Massen)⁶⁾はブレヒトの詩『党を称える』(Lob der Partei)に対し、「党は前衛である／しかし大衆が闘う／主力部隊なのだ」と歌い、社会主義政権成立後というあたらしい状況の中で、権力の座に就いた党に対して大衆の役割の強調という力点の置換えを行っている。1969年の詩集『彼らではなく我々』(Wir und nicht sie)においてはやはりブレヒトの詩『読書するある労働者の問い』(Fragen eines lesenden Arbeiters)を下敷きにして「我々」労働者と「我々の権力」の双方の乖離を批判する。

『統治するある労働者の問い』(Fragen eines regierenden Arbeiters)⁷⁾

こんなにもたくさんの報告。

こんなにもわずかの問い。

新聞は我々の権力を伝えている。

我々の内のどんなにたくさんの者たちが

ただ何も言うべきことがなかったという理由で

今なお口を覆ったままであることか

恥部を覆うように

放送局は我々の針路を世界に知らせている。

どのように残されているのか、動いている機械のそばで、

二つのレバーの間で、我々に選択の余地が。

広場には我々の名前がある。

みんなその広場に立っているか、

新しい決定を

下すために。多くの者はただ黙って

工場へ行くだけだ。王座に座っているのは
我々の人々だ—君たちは我々の意思を
十分に尋ねているか。なぜ
我々はいつも十分に発言しないのか。

ブレヒトの詩においては、学びはじめた労働者が、歴史に残されている
大事業における書かれざる民衆の役割について問うのだが、ブラウンのこ
の詩においては、その民衆が主人公であるはずの社会主義社会において、
労働者の側からの問いが出されない、そしてまた政権の座にある者たちも
労働者の意思を十分に問わない、という新しい問題状況が呈示されている。

3. 詩が政治に介入せざるをえない理由

彼は70年代のはじめに詩論『政治と詩』(Politik und Poesie)⁸⁾を書いて、
政治詩の存在理由を自覚的に語っている。「詩はひとつの長いプロセスで
ある」という視点、つまり詩は人間の歴史の過程において形成され、変化
していくものとして捕える視点から出発している。そして、この視点から
19世紀半ば以降の詩の歴史を概観して、つぎのように詩と政治の関係を導
き出す、「この100年来進行している詩の歴史のプロセスは、繰返し残忍な
国家権力の介入によって引きのばされ、プロレタリアートの行動によって
促進されて来ているが、そこにおいて重要なのは、詩人が社会の中でどの
ような役割を演じることができるか(そして演じることが許されるか)と
いう問題である。つまり、詩人が詩人としてより重要な人間の決断に、す
なわち政治に、介入することができるか、そして介入することがゆるされ
るか、という問題である。」そして、詩が政治に介入せざるをえない理由
について彼はこう説明している、「詩が表現するもの、すなわち感受され
た人間の諸関係、その苦しみと喜びは詩によっては除去されたり、生みだ
されたりはされ得ないからこそ、詩は「外に向かって」働きかけ、自らの

外へ出ていかざるをえない、多くの人々が詩に語られたものを現実に克服または実現するために。それが詩の政治的な本質である。そのために詩は恐れられ、迫害され、読まれ、そして広められる。」ここに語られているのは、端的に言えば政治は詩よりも重要な人間の活動である、という立場であり、その根拠は、人間の苦しみ克服や喜びの実現は詩ではなく政治によってはじめて現実に行われうるものだという考えである。ここにブラウンの政治詩人としての根拠があるのである。その立場から、「詩は非政治的であってはならない、しかしまた「政治の道具」であってはならない—それは詩の本質に反するだろう」というエンツェンスベルガーの主張に対して、「まるで行くに値する政治がないかのように、まるで人間の諸目標が今日（特定の）政治を必要としていないかのように」と反論している。

一方その同じ立場からDDRの社会主義社会における詩の現状についてもすでに、その実践的な介入の姿勢の欠如を厳しく批判している。「単なる賛美は赤いインクで書かれた解釈学である」と。ここで「解釈学（Hermeneutik）」というのは、現実との実践的な関係を拒否し、言葉の内部で完結する詩の捕え方を指している。あるいは、「〈働きかける主体性〉のはずが失業した主体性になっている。詩人は観客となっており、諸関係を変えない。関与が単なる肯定へと硬直化している」などと。さらに、検閲の問題や「社会主義的民主主義」というような問題が詩において生産的に検討されるやいなや、すぐに詩人に対して批判が加えられ、現実の状況を是認していることの合図としての「身分証明の言葉」が求められるというような、文化政策の問題点が指摘されている。

4. 壁の上を歩く妖怪 Gespenst, das auf Mauern geht

74年の詩集『左右対称の世界に抗して』（Gegen die symmetrische Welt）では、『ジャズ』のようなプログラム詩は姿を消し、「ぼくはぼくの部屋からスローガンを消す／合言葉からそっと抜け出す、泥棒のように／決まっ

た意図なしに、ありのままを見る目をもって路上に」（『自発的な発言』*Freiwillige Aussage*）⁹⁾というような詩句に端的に語られているように、現実の社会主義社会の矛盾の指摘が中心となっていく。そしてそこに見えたのは、たとえば「我々が内容のないデータを食んでいる間／うすっぺらい紙きれから計画をでっち上げている間／路線にすがっているあいだ／我々が本来何をしているのか、ほとんどわかっていない」（『本来のもの』*Das Eigentliche*）¹⁰⁾という様子だったり、あるいは「町の住民たちは／洗濯もののかげから／まるで蠟人形になったように／銃剣を／青ざめて、見詰めている」プラハの68年春の様子だったりする。

そうして1979年の詩集『直立歩行のトレーニング』（*Training des aufrechten Gangs*）に収められている詩『段』には、「壁の上を歩く妖怪」として「我々の権力」が登場するに至る。

しかしすでに我々自身のものであるがしかしなお馴染めない
大地には段がつけられている、天国へのはしごのような
あるいは地下室への階段のような、人間と人間
頭ひとつ低かったり高かったり、その官職が人間を
持ち上げたり、または押えついたりするのにつれて。その官職がその
労働である
ある者たちが紙の上に計画を描く
他の者たちはそれをがつつ食らい、それについて頭をめぐらすこと
もない—
ある者たちが考えるからである。頭手尾
見知らぬ肉のようにぶらさがっている、マネキン人形
ただひとつのことだけをせよという、強制に引き裂かれて、
言ったりまたはシタリ、上役とクーリー
たくましく生きている。段をつけられたこの堆肥の上で
生じているこの曲がった背中や歪んだ耳や舌に

私は別に文句があるわけではない。私は抑圧の
悲鳴に心を動かされることはない—それを私は理解する
すでに言ったように、私は生きるのが好きなのだ。
しゃべり食べ働くこの労働は
我々がそれを引き裂くまで引き裂かれている
この仕事のために一千年、段階づけによって
傷つけられたこの国家にまで
大昔からずっと引き継がれている境界線、
我々の権力が病んでいる疫病
そしてそれは我々の権力を壁の上を歩く妖怪にしてしまっている。
それは大変なことだ、しかしそれですべてだ。

(『段』 Die Stufen¹¹⁾ から)

計画を立てる者と何も考えずにその通りやる者との、権力を持つ者とそれに従う一般の労働者たちとの分離、という「段階づけによって傷つけられたこの国家」、その疫病によって「壁の上を歩く妖怪」になってしまった「我々の権力」のグロテスクな姿。なぜ壁の上を歩くのか。それはそれによって仕切られている境界線を監視するためである。もちろん、この「壁」(Mauer)には「ベルリンの壁」のイメージが重なっていた。

『ジャズ』において要請された個人と社会の「動きのある統一」とはまったくかけ離れた社会の姿がここにはある。そして、同時にまた、その語り口の変化も大きい。戯画化された語手の「私」、その語手はもはやあるべき未来の社会の姿を呈示しようなどとは考えない、「段をつけられたこの堆肥の上で／生じているこの曲がった背中や歪んだ耳や舌に／私は別に文句がある訳ではない。」「私」は自分が生き延びるのに精一杯である。この語り手の戯画化は、同時に句読点をわざと外してあいまいに続くじょう舌体と符合している。

5. ブレヒトの忠告：病んだ機関は切るべし

こういう現実の姿を前にして、ブラウンはブレヒトの「自分の墓を眺めながらの提案」を思い出している—

その非常に細い声で、それは我々を余りに
狼狽させないためだったが、彼はまだ間に合ううちにアドバイスした
どこがチクチク痛むのかをさっさと言うべきだと
そうしてその器官を治療するか、または切断すべきだと。

（『ブレヒトに。真実が一致させる』
Zu Brecht, Die Wahrheit einigt¹²⁾ から）

しかし、「我々はその提案を受け入れなかった／ただ一定の用語や髪型を除いて。」そして我々の「肉はぶ厚く、精神は狭く」なり、ブレヒトは「古典家になり、埋められてしまっている。」ここで思い出されているブレヒトとは、レーニンを引用しながら社会主義社会の建設の困難さについて率直に真実を国民に知らせる姿勢を指導者たちに要請した『真実が一致させる』（Die Wahrheit einigt）をはじめ、1953年6月17日の労働者の反政府行動に関して、作家同盟書記クーバの政府追従の姿勢を痛烈に皮肉った詩『解決』（Die Lösung）などの作者としてのブレヒトである。ところで、引用した最後の行の病んだ「器官」（Organ）とはもちろん権力「機関」（Machtorgan）を指している、例えば、次のような。

『文学局』（Das Amt für Literatur）¹³⁾

文学局は周知のように共和国の
出版社に紙を分配している、その貴重な資料の

これこれの量を歓迎される作品のために。

歓迎されるのは

諸新聞の報道から文学局が知ることのできる

公式の理念が書かれている作品である。

この習慣は

我々の諸新聞の在り方から考えると

紙の大量の節約を可能にするはずである、もしも

文学局が我々の諸新聞の伝える理念のために

いつもただ一冊の本だけを許可するのならば。残念ながら

文学局は諸新聞の伝えるひとつの理念を大急ぎで擁護する

すべての本の印刷を許可することがしばしばなのだ。

その結果

幾多の巨匠の作品のためには

従って、紙がない。

6. 歪んだ文体と歪んだ現実

詩集『直立歩行のトレーニング』においてすでにハラルト・ハルトウン
グは「ほとんど覆いかくすことのできない絶望の証拠」を指摘している
が¹⁴⁾ 1987年に出版された最新の詩集『きしみつつ、ゆっくりと訪れる朝』
(Langsamer knirschender Morgen) においては、その傾向は一層あらわ
になっている。そこでは未来への積極的な展望を失った社会像、そしてそ
の閉塞状況の中で呻吟する個人または詩人のグロテスクな心象風景が基調
となっている。社会批判は一方ですます辛辣に、そして冷笑的になり、
他方で内向する。社会への働きかけの可能性を信じられなくなった個人ま
たは詩人の無力感、そしてかって抱いた夢へのはかない追憶、言葉の中だ
けの無効な批判を続ける自己の滑稽な姿の暴露、そしてそんな個人を無視
して進む社会体制の構造の残酷さなどが描き出される。語り口は今や、読

者への直接の呼掛けは消え、宛てのないモノローグへ、そしてその独白もしばしば途切れる。引用に引用が重なり、語り手の言葉と他者の言葉が見分けがたくもつれる。文章も単語も完結せず、イメージは錯乱し、グロテスクに変形する。

ブラウンもまた80年代なかばまでの時点で、60年代のあの力づよい、批判的であつ樂觀的な文体を失った。それは、個人の創造性の発揮に基づく「動きのある統一」という社会主義のプログラムが病んだ権力による段階づけによって阻害されて、「錆びついた追憶」となってしまった現実と符合している。

儀礼服の

胸飾りとしての希望、未来への

錆びついた追憶

社会主義、辛うじてひとつのメタファー

しかし何の？

(『上司の庭での会話』 Gespräch im Garten des Chef¹⁵⁾ から)

ゲルハルト・ヴォルフは『ベルリン・エピグラム』(Berlinische Epigramme)¹⁶⁾の次の詩句に「自己破壊的な疑い」(selbsterstörerischer Zweifel)を感じ取っている。¹⁷⁾

このように肉体は引き裂かれ、ここに棲みつきながら、しかしくつろ

げない

愛しながら愛されず、思考する、しかし嫌疑をかけられながら。

そして、『ブレーキをかけられた生』(Das gebremste Leben)における次のような詩人の「荒れ狂う思考」(Rasender Gedanke)、または現実への

「同意と拒否」という「冷温交互浴」(Wechselbad)¹⁸⁾の中で揺れ続ける
詩人の戯画もまた、詩人を取巻く状況のグロテスクを映すのである。

お前の道を行け
もしそうできるなら
会議人間よ
毛穴を開けよ。

ひとつの異物、私の形をした
交通渋滞で
頭の中は：赤
シェーンハウザーの角で

[……]

さて私はひとつの大きな文をページの端まで作る
そしてブレーキを外す
荒れ狂う思考
すべての者たちにすべての者たちにすべての

きしむ音を立てるある夕暮れ。
ロケット型のサイロでは
牛どもがまた
スローガンを食んでいる。

(『ブレーキをかけられた生活』Das gebremste Leben¹⁹⁾ から)

あるいは、次のような言葉の切断と変形も見られる。

前進セヨ ソシテ ワス

ワス

かびくさくなる／ほける／裏切るな

[……]

前進セヨ ソシテ ワスレルナ

兄弟タチヨ

堅実さが大事だ。

レン

タイタイタイ

(『マテリアルⅦ：平和』 MaterialⅦ：Der Frieden²⁰ から)

しかし同時に、これらはまたひとつの戦術でもあるのだ。個人を抑圧することによって本来の社会主義的な連帯意識を切断してしまう現実を描きだすには、このグロテスクな文体が必要なのだ。プレヒト／アイスラーによる1931年の『連帯の歌』(Solidartätslied)の有名なりフレイン、「前進せよ、決して忘れるな／連帯を！」は、今や「連帯」(Solidarität)が小市民的な美徳の「堅実さ」(Solidität)になり、あるいは分解され、チョン切られる。このパロデーはかつての理想との落差を際立たせている。

7. 党、我が領主よ Partei mein Fürst

このようなグロテスクな現実に君臨する権力に取り囲まれ、浸蝕される詩人の自画像を詩『封土』(Das Lehen)²¹)は描き出している。

私は国にとどまり、東で暮らしを立てる。

命の危険をとまなう私の文句で

他の時代ならばだが—まだ私は元気だ。

お上から貸してもらっている住居で

私はたらふく食っている、君たちと同様に、家畜の餌を
そしてエライさんたちのいる階にいるがうれしくならない
私が求めている宿は国家ではない。

十の戒律と鉄条網を持った—

兄弟たちに合うことができるなら、亡霊たちではなく。

どのようにして私はこの構造の冬を切り抜けるのか。

党、我が領主よ—党ハスベテヲアタエテクレタ

そしてすべてはまだ生活ではないのだ。

私が必要としている封土は授けられるものではない。

この詩に作者は次のような注を付している—「Ich hân min lêhen 私には自分の封土がある—この喜びの叫びと共にヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは1220年頃、シュタウフェン朝の家来となったことを誇らしげに告げた。」²²⁾

ここで言及されている詩は、ヴァルターのいわゆる政治的格言詩の一つである (Lachmann 28, 31)。形式の面では、ヴァルターが10行でブラウンは13行と異なり、行の長さも、アクセントの数も異なっている。弱強格を基調としたリズムには類似性がないとも言えないが、より意識的にブラウンがヴァルターのその詩を真似ているのは、最初の三行と最後の三行をそれぞれ同じ韻でまとめるという、その押韻の踏みかたである。語句の点では、直接の引用やもじりなどはない、と言っていいだろう。もちろん、ヴァルターの第一行「私には自分の封土がある、全世界よ、私には自分の封土がある！」に、ブラウンの最終行「私に必要な封土は授けられるものではないのだ。」が対置されている。しかし、これは語句というよりも内容上の対応関係というべきだろう。この対応が端的に示しているように、ブラウンの詩は内容的にはヴァルターの詩の反対作品である。ヴァルターのものは、いわゆる政治詩の古典的なカテゴリーの一つである「支配者賛美」(Herrscherlob) であり、そこで称えられている「高貴で、寛大な王」

とは神聖ローマ帝国のフリードリヒ2世である。これに、ブラウンでは「党」、すなわち共産党、具体的にはもちろん東ドイツのSED（社会主義統一党）が対応している。しかし、ブラウンでは、党への感謝は示されていない。もちろん、「党ハスベテヲアタエテクレタ」という一文があるが、これは原文の斜字体が示すように他人の詩句の引用である。その他人とは、東ドイツの詩人ルイ・フェルンベルクである。彼は、1949年に次のような詩を書いた。

党は我々に全てを与えてくれた、
太陽と風を、そして決して惜しみはしなかった
そして党がいたところには、生活があった、
そして我々が今日あるのは、党によってである。

党は我々を決して見捨てはしなかった、
世界がほとんど凍え死んだ時、党は我々に暖かかった。
我々を大衆の母が導いてくれたのだ、
その力強い腕が我々を抱きかかえてくれた。

党
党
それは何時も正しい
同志たちよ、それでよし！
というのは正義のために
戦う者は
いつも正しいからだ、
嘘やへつらいに対して。

(『党』 Die Partei²³⁾ から)

今読めばすべての行が反語ではないか、と思えてしまうが、これは80年代になってもまだ出版されていた詩である。ブラウンによるこの引用は、古典的な「支配者賛美」が社会主義国で、「党賛美」と形を変えて生きのびたことを思い起こさせる。これは現実をリアルにみつめる視線を欠いた「単なる賛美」としての、「赤いインクで書かれた解釈学」の例といわなければならない。ブラウンはすでに前述の詩論においてこの「支配者賛美」という政治詩の形態が今日不可能になったことの原因について、こう述べたことがある、「支配者賛美は多かれ少なかれ衰弱した、いろいろな世界の指導者たちを弁護する空虚なおしゃべりにまで。〔……〕支配者賛美と支配者誹謗は今日どんな詩をもはや生みださない、とハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーは正当にも語った。しかし彼はその理由を明確には語らなかった。結局このふたつのものは今日の歴史における個人の役割が変化したためにもはや不可能となったのである。〔……〕帝国主義における「支配者たち」（この言葉自体がもう慣習に合わなくなっている）は隠れた糸に操られるカイライであり、交換可能で、血なまぐさい道化である。社会主義における「支配者たち」は余りに多くなり、個々のまだ非常に目立った者たちが「賛美される」ことはありえない。²⁴⁾

これは、詩の主題だけではなく、その構造も歴史的な条件によって変化する、という例として取り上げられているのだが、詩『封土』の文脈で興味深いのは、社会主義の政権党が封建時代の領主と同格で呼ばれていること、つまり引用した考え方に従えば、歴史的な変化が逆戻りしていることになる、点である。政権党が大衆と遊離し、古い支配者に似た位置を占めることによって再び「ありえないはずの」賛美の対象となっている、という皮肉である。

しかし、皮肉の主な対象となっているのは、そのような党に仕えている詩人の在り方の方である。彼は政治的に批判的な詩人であるのだが、今その批判的な Spruch（ここではフォーゲルヴァイデの政治的な「格言詩」

という意味とともに現在の日常的な意味としての、否定的ニュアンスをともなった「キマリ文句」という二重の意味をもっている）によって命を落とすこともない時代に生きている。

ここの「別の時代」に関して、ブラウンは1989年8月の筆者とのインタビューで、ある興味深いエピソードを語ってくれた。彼の『未完の物語』（Die unvollendete Geschichte）が激しい批判を浴びたとき、作家同盟で二度集会が開かれた。その際アンナ・ゼーガースが立って、彼を擁護する発言をした。その内容については彼は詳しく話さなかったが、そのどちらかの集会の休憩時間に、ゼーガースがブラウンに小声でこう言ったというのである、彼の伝えたドイツ語そのままを引用すると、“Weißt du es nicht, daß man vor einiger Zeit dafür verschwunden wäre?”つまり、「少し前ならこのために消されてしまっているところだということを知らないの？」ブラウンは、この人は、つまりゼーガースは一体何を言っているのだろうか、と全く驚いた、ということだった。そして、たしかに作品を巡る政府との軋轢はいろいろすでに経験していたが、その際には、怒りは感じて、ゼーガースが言ったような「命の危険がある」というような不安は感じたことはなかった、のである。その別の時代とは、スターリンの時代でもありうるし、ウルブリヒトの時代でもありうる、とも彼は言っていた。

さて、そういう政権に批判的な詩人ではあっても、そのような命の危険までは感じない（もちろん投獄や西側への追放ということは有りうるわけだが）。そして、その批判的な詩人も、これはヴァルターのあの詩に書かれたのとは違って、貧しくはなく、住むところも食べるものも保障されている。もちろん、その食べ物も質は別にして。さらに、彼は、Chefetage、つまり特権層にすでに属してもいるのである。こういう、権力者に庇護された批判的な政治詩人、という矛盾した存在が描かれているわけである。つまり、これはすでに政的詩人としての存在を危うくさせる状況である。実際にフォルカー・ブラウンに対しては、ピーアマンなどのように追放さ

れた詩人たちとの比較で、さまざまな政府との軋轢にもかかわらず、妥協的だという批評がなされることがある。²⁵⁾

この詩は時としてそういう批判も呼びおこすような、東ドイツの批判的詩人というものの矛盾をはらんだ姿を描いているが、しかしもちろん注意しなければならないのは、その描くタッチ、あるいは語るその口調である。この詩は余りに大真面目に読むと、間違う詩である。これは、愉快的詩である、もちろん切実な問題を含んではいるが、しかしそれをユーモラスに語ることのできる作者の余裕を見落とすことはできない。例えば、すでに触れたように、この詩は13世紀のヴェルターーの詩とさらに第二次大戦後のフルンベルクの詩の二重のパロディーでもある（もちろんその両者への対応の仕方は異なっているのだが）というこの詩の基本構造が、すでにストレートな自己描写とはほど遠い。さらに、個々の表現、たとえば、Spruchの二重の意味や、一行目にしてもすでに、「国にとどまって、実直に暮らす」（Ich bleibe im Lande und näre mich redlich）という格言のもじりであるなど。これらがおどけたような、自分を卑下するような、滑稽な調子をもたらしている。ここで、詩人は、自己の置かれている矛盾をはらんだ状況を戯画化することによって描き出そうとしているのである。自己の立場の正当さを前提として、回りの状況を批判し、高い口調で指弾する、という政治批判の詩の文体が放棄されている。

その戯画のおどけたタッチのなかで、しかし真剣なこともまた語られているのである、一層効果的に。つまり、自己卑下した詩人はしかし、その矛盾の中から、やはりその克服への意思を放棄してはいないこと、詩人に対して領主のような存在になっている党との今の関係においては、真の生活は手に入れることはできないこと、詩人としての自由な生活を不可能にしている状況（「構造の冬」）の克服、という課題を最後にやはり語っているのである。矛盾の中に陥っている者の、かろうじての思いの表出として。

8. 構造の冬 Winter der Strukturen

ところで、「構造の冬」とはなにか。同じ詩集の中の詩『マテリアルⅧ：鉄の車』(Material VIII: Der Eisenwagen)²⁶⁾に次のような詩句がある—

諸民族の春。希な時代
まどろみから覚めて、自由な野外へと
彼らが出ていくなれば。構造の
氷が破れ、好奇心に満ちてうなじを上げる
抑圧された者。

ここでは、この「構造の氷」は直接には、ロシア革命の前の時代の社会の在り方を指しているが、しかし、この状況は、今後あるべき革命、あるいは革命的な変化、現在の社会主義国の内部におけるものも含めて、のイメージとしても読まれ得るものである。事実、はじめに紹介した89年11月の一文の冒頭にはこの5行が掲げられたのである。この作品において、本来目指した革命の方向が、その武器としての鉄の車=前衛党が革命後、自分の行こうとする方向とは別のほうへ行ってしまうこと、そしてその鉄の車がいまや権力の全てを独占する途方もない「怪物」(Ungetüm)となっていくことを止められないレーニンの死の間際の暗澹たるモノログが語られていることから、あきらかなように、これは、現在の社会主義社会もまたやはり「構造の氷」に覆われている、というメッセージなのである。そしてこれは、個人の創造性の発揮を封じ込むという点で、「動きのある統一」の対極にあるイメージである。

ブラウンは、先のインタビューで、東ドイツの政府の指導者たちは、善良でまともな(anständig)な人々である、しかし構造が残酷なのだ、と語っていた。Grausamkeit der Struktur と。それは政治局にまで及んでいて、

たとえば政治局員は皆同じような、個性のないことしか語れない、それは事前に演説がすべて細かくチェックされてしまうからだ、と。

では、その構造の冬を克服するのに必要なのは何か。新しい社会の在り方についての思考か、それとも政治的な運動か、と問うと—ルードルフ・バーローをはじめ、そのような思考はすでにたくさんあった、今もそのような新しい思考を持っているものは沢山いる、SEDの内部にも、と述べて、必要なのは、行動だと、暗示した。

そして、今、党にとどまるべきか、出るべきか、という問いが焦眉の問題になっていると述べて、つぎのような興味深い、ことを話した。

「真に適切な時点で、新しい組織が作られ、そこに批判的な人材が必要とされる時に、党を出るということも考えられる。クリスタ・ヴォルフは3週間前、離党した。私も、ある決断をすることに傾いている。」

今後、ブラウンがどういう決断をし、どういう行動をするか、大変興味深い。冒頭に紹介した89年11月のSED機関紙上の一文から見ると、彼は熟慮の上で党（SED）に止まり、内部からの改革に賭けたのだと、思われる。²⁷⁾それはともかく、この詩『封土』にも暗示されている今の党との関係に変化を求める要求は、この戯画的な口調にもかかわらず、十分に真剣なものでもあるのである。

自己を戯画化することによって、社会を戯画化する、あるいは、自己の歪んだ像を差出すことによって、社会の歪んだ像を写し出す、というこの文体。絶望的な、込みいった、絡め手からの、イロニーを主武器とする戦術、意識的かつ無意識的な。これが、85年以前の、ゴルバチョフ以前に書かれた、現代東ドイツの代表的政治詩人の一人フォルカー・ブラウンの取らざるをえなかったひとつの戦術である。しかし、自己の戯画を書ける者はまだ絶望していない。そのユーモアの背後にあるのは、まだ維持されている現実介入の姿勢である。つまり、戦術の意識である。それに関して、ブラウンは1987年の東ドイツ作家大会での発言の中で次のように述べてい

る、「もし哲学が居眠りをしているなら、そして哲学が現実の生活の中に結びつくことのできる力を感じとれないときは、その休息を乱すものとして、芸術の絶望的な子供じみた馬鹿騒ぎ」という「書く際の戦術」(eine Schreibstrategie)²⁸⁾があると。これに、「近代の馬鹿げた子供部屋に繰返し詩人たちは居座ってきた」²⁹⁾という、シュールレアリスムの詩的な実験のことを語っているランボーについての1983年のエッセイの一節と重ね合せるとき、ブラウンの実験的な文体の背後の戦術意識を読みとることができる。そして、この作家大会での発言は、「しかし今や動きが感じられる、つまり、何かが流れはじめた、そして問いが始まっている！」と続いている。これはもちろん、「世界の立て直しであり、世界的な規模での本当の実験であり、民主主義の模範的な試み」であるソ連の改革の動きを指している。

9. ある始まり

この作家大会以後の、ベレストロイカ以後の新しい詩として未発表の連作『ジグザグ橋』³⁰⁾がある。これは1988年の中国旅行を契機として書かれた27篇の短い詩からなる連作で、ブラウンの言を待つまでもなく、その短詩形においても、また政治的な内容においてもブレヒトの連作『ブッコウ悲歌』を連想させる、というよりそれに倣ったものである。ここには、87年から89年6月にかけての、つまり89年秋の転換点の直前の東ドイツの政治状況に直接関連する次のような作品がある。

『壁紙張替え』(Tapatenwechsel)³¹⁾

行政当局は私に説明する

彼らは建て直しをとっくの昔にまったく静かにやり遂げたのだと。

しかし家はより広くはなっていない

階段は窮屈だ

そして部屋はより明るくなっているだろうか。

そして人々はなぜ出ていくのか、入って来るのではなく。

言うまでもなく、これは、89年秋に解任されるまで25年以上も文化・イデオロギー問題担当の政治局員、つまり東ドイツの文化政策の最高責任者だったクルト・ハーガーが1987年にソ連のベレストロイカに関して述べた「隣の家が壁紙を替えたからといって、我々の家もそうする必要はない」という旨の発言への皮肉である。89年の改革運動の引金となった夏以来の大量出国をも結果的には予想したかのような作品である。同じく、この東ドイツの文化官僚の頂点にいたこの人物について、こういう風刺詩もある。

『小さな方法』(Die kleine Methode)³²⁾

いつも宮殿から文化坊主がやって来て

農耕と飢餓水腫を病んだ経済の

深刻な状況について話す一集まった

俳優や芸人たちが

彼ら自身の望みを隠している

帽子とともに大変小さくなるまで。

これらは余りにも現実の政治状況に密着し過ぎている、つまり余りにジャーナリスティックに成りすぎている、という批判は有りうるだろうが、『ブッコウの悲歌』において、ブレヒトが1953年6月17日の事件をその直後に直接取上げた姿勢を受けついでいる、とすることができる。例えば次に掲げる『スターリン通りの壁職人』は、その53年の出来事を扱いながら、まさに1989年秋の事態を夢想していたかのようなのではないか。

『スターリン通りの壁職人』(Der Maurer von der Stalinallee)³³⁾

大きな石材の下で

私は一人の壁職人におつかる。彼は属している

沈んでしまった階級に、

正確な壁を作り、そして

決起をした。夢の中で

私は再び彼を足げたの上へと連れていく、

汗びっしょりになって

ある始まりに。

1953年6月17日、東ベルリンのスターリン通り(現在の「レーニン通り」)で建築労働者たちが、労働ノルマの一方的な引上げと生活物資の不足などに抗議して、反政府デモを行った。そして、ソ連軍の戦車によって、武力鎮圧された。この事件について東ドイツの従来の公式見解は、西ドイツ政府や西ベルリンのアメリカ軍などによって操られた反革命暴動、というものだったが、1989年12月のSED臨時党大会におけるギジ新党首の大会報告では、この事件の評価の見直しの必要性が述べられている、「1953年と1956年の社会主義刷新の試みは、より正確な分析が必要であり、それは1953年6月17日の事件についても同様だが、そうした試みは圧殺された」³⁴⁾。そうした圧殺されてきた評価のひとつを、当時この事件を目撃したプレヒトの次のような作業日誌(53年8月20日)の一文に見ることができる、「あらゆる無方針さや悲しむべき無力さという形ではあるが労働者たちのデモはしかしなお、ここに興隆しつつある階級(die aufsteigende Klasse)がいる、ということを示している。」³⁴⁾そして、ブラウンはこの「興隆しつつある階級」を戦車によって押しつぶされてしまったが故に、「沈んでしまった階級」(die versunkene Klasse)と表現している。「社会主義」

社会においては「沈んでしまった階級」はブルジョワ階級のはずだから、これはもちろん苦い皮肉である。そして、ブラウンはその労働者を夢の中で再び足げたの上へと連れていく、ある始まりのために。見事な予言と云うしかない。しかし、これは長いあいだ東ドイツの多くの人々に抱かれてきた夢のイメージなのだ、反対派の願望として、そしてまた政権の座にある人々の悪夢としても³⁵⁾。ブラウンはその夢の情景を詩人として適確に表現したのである。しかも、注意すべきは、この詩の「私」は単なる傍観者ではなく、汗びっしょりになって、その労働者を再び押し上げる者として登場していることである。「我々の権力」、労働者の真の権力の実現を求めて現実介入しようとする詩人にして始めて思い描くことのできるイメージなのである。

おわりに：広場に立った人民

1969年の詩集に収められていた詩『統治するある労働者の問い』における批判の視線は「我々」一般の労働者たちと「玉座に座っている我々の人々」、つまり国家権力を持っている者との双方に向けられていた。「人民」の名を冠した多くの広場や「人民所有」工場が生れた。にもかかわらず、労働者はその広場に集まって国の在り方を決定するという、「統治する労働者」らしい行動は取っていない。かわりに、ただ工場に出かけ、機械のそばに、レバーの前に立つだけである。そして、権力の座にある者たちに、問いを投げることもない。このような、受動的な、以前と変わらない被統治者としての態度が問われていた。そして一方で、権力を持っている者たちもまた、労働者の意見を十分に聞かない、ことが問われていた。この後、70年代から80年代にかけて、ブラウンは権力批判を強めていき、10年後の1979年の詩集『直立不動の歩行訓練』に収められた詩『段』では、計画を立てる者と何も考えずにその通りやる者との分離という「疫病」によって「壁の上を歩く妖怪」になってしまった「我々の権力」のグロテスクに姿

を描いていた。しかし、にもかかわらず、「我々の権力」(unsere Macht)という表現が保持されていることに注目されなければならない。これは、一方で、本来労働者の権力であるべきなのに現実には彼らから遊離してしまっているという現実の権力の在り方への皮肉として用いられているが、しかし同時に他方で、にもかかわらずそれは、労働者の在り方、行動の仕方によって、「我々の権力」という本来の姿にするべきものであるという視点をも示している、ということができただろう。だからこそ、ブラウンは権力批判の一方で常に、「我々」自身への批判も忘れないのである。ここには、社会主義社会の本来の理念を放棄せず、現実の「社会主義」社会の在り方の改革を目指すというブラウンの基本姿勢が現れている。従って、この詩において、一般の労働者が問いを出さないこと、統治する者としての姿勢を欠いていることへの批判は、つまり彼らへの行動への呼びかけなのである。そして20年後の1989年、人々は広場に立ったのである。発端となったライプチヒの10月9日の月曜デモはカール・マルクス広場から始まり、ブラウンなどの演劇関係者たちが中心になって呼びかけた11月4日のベルリンの50万人デモはアレキサンダー広場を埋めた。そこで一般の労働者たちは、もはや口を覆ったままではなく、初めて事前検閲なしのスローガンを掲げて歩き、国の在り方を自分たちで決定するという新しい「自由の経験」を始めたのである。

ところで、「民主主義」というこの新しい「自由の経験」の後に、ドイツ統一の問題が急浮上し、それとともに「資本主義」というさらに新しい(または古い)「自由」に今や東ドイツの人々は直面しつつある。ブラウンなどの社会主義的改革派の詩人たちがその新たな状況においてどのような行動と詩作を展開しつつあるか、大変興味深いのが、それはまた稿を改めて検討すべき主題である。

注

- 1) In: Neues Deutschland, 11./12. Nov. 1989
- 2) In: Volker Braun: Gedichte, Reclam Leipzig 1976, S. 19
- 3) ebd. S. 18
- 4) ebd. S. 22
- 5) Hans Koch による批判。In: Forum 15–16/1966. Aus: Manfred Jäger: Kultur und Politik in der DDR. Edition Deutschland Archiv, Wissen und Politik Köln 1982, S. 129
- 6) In: Volker Braun: Gedichte, Reclam Leipzig 1976, S. 49
- 7) In: Volker Braun: Gedichte, Suhrkamp Frankfurt am Main 1979, S. 42. この詩ははじめ『革命中のある労働者の問い』(Fragen eines Arbeiters während der Revolution) という題を持っていたが、ブラウン自身の編集したズーアカンプ社の上記の詩集において題名が変更されている。
- 8) In: Volker Braun: Es genügt nicht die einfache Wahrheit, Reclam Leipzig 1979, S. 82–95
- 9) In: Volker Braun: Gegen die symmetrische Welt, Suhrkamp 1974, S. 7
- 10) ebd. S. 38
- 11) In: Volker Braun: Training des aufrechten Gangs, Mitteldeutscher Verlag Halle (Saale) 1979, S. 17
- 12) In: Bertolt Brecht Gesammelte Werke in 8 Bdn. Bd. 4, Suhrkamp Frankfurt am Main 1967, S. 1011
- 13) ebd. S. 1007
- 14) Harald Hartung: Deutsche Lyrik seit 1965. Tendenzen, Beispiele, Porträts, Piper Verlag München/Zürich 1985, S. 134
- 15) In: Voker Braun: Langsamer knirschender Morgen, Mitteldeutscher Verlag Halle. Leipzig 1987, S. 11
- 16) ebd. S. 63. Berlinische Epigramme Nr. 4
- 17) Gerhard Wolf: Wortlaut–Wortbruch–Wortlust, Reclam Leipzig 1988, S. 87
- 18) ebd. S. 87
- 19) In: Voker Braun: Langsamer knirschender Morgen, S. 42
- 20) ebd. S. 41
- 21) ebd. S. 46
- 22) ebd. S. 91
- 23) In: Fürnberg. Ein Lesebuch für unsere Zeit, Aufbau Verlag Berlin und Weimar 1982, S. 169
- 24) Volker Braun: Es genügt nicht die einfache Wahrheit. S. 88
- 25) Vgl. Birgit Lermen/Matthias Loewen: Lyrik aus der DDR, Schönöningh UTB1470 Paderborn. München. Wien. Zürich 1987, S. 61
- 26) In: Voker Braun: Langsamer knirschender Morgen, S. 49

- 27) SEDはその後89年12月に SED・PDS と党名変更し、90年に入ると SED をはずして、単に PDS (民主的社会主义党) と改名した。ブラウンとこの党のその後の関係は未確認である。
- 28) Neue Deutsche Literatur, 36. Jg./423. H./März 1988, S. 46
- 29) Volker Braun: Verheerende Folgen mangelnden Anscheins innerbetrieblicher Demokratie, Suhrkamp 1988, S. 127f.
- 30) Die Zickzackbrücke. 1989年8月にブラウン自身から受け取ったタイプ原稿の写しに拠る。その後 NDL 1990年1月号に発表された。
- 31) 原文は以下の通り。
Die Verwaltung erklärt mir
Sie habe den Umbau längst in aller Stille vollzogen.
Aber das Haus ist nicht geräumiger
Die Treppe unbequem
Und sind die Zimmerchen heller ?
Und warum ziehen die Leute aus und nicht ein ?
- 32) 原文は以下の通り。
Immer kommt der Kulturbonze aus dem Palast
Und spricht von der ernsten Lage
Des Feldbaus und den Ödemen
Der Ökonomie: bis die versammelten
Mimen und Massenkünstler
So klein sind mit Hut
An den sie die eigenen Wünsche stecken.
- 33) 原文は以下の通り。
Unter den Großblöcken
Stoße ich auf einen Maurer. Er gehört
Zu der versunkenen Klasse
Die genaue Wände machte und
Den Aufstand. Im Traum
Führe ich ihn wieder auf das Gerüst
Schweißgebadet
Eines Anfangs.
- 34) 朝日, 1989年12月19日付
- 13) 参照, ロベルト・ハーヴェマン: 私は亡命しない。朝日新聞, 朝日選書171, 1980年 112頁。